

有能系社内ニートのAGE 転生物語

ヒロキ@クロス好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仕事はできる。出世は見込める。しかしそれを見事に殺す程のサボり癖があった!!
そして彼は図らずも社内ニートとなった!!!

だがやるときはやるヤツだったので問題視されなかった!!!

そんな彼が――

「人人人人人」

∨ 突然の死 へ

? Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ?

| 人 人 人 人 人 人 人 |

∨ からの転生 へ

? Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ?

あらゆるものを喰らう「アラガミ」

その脅威に抗う「ゴッドイーター」が存在する世界。

そして、人類をさらに滅亡の危機に陥れた厄災「灰域」の発生により、対抗適応型ゴツドイーター、通称「AGE」が誕生する。

転生してAGEとなった彼は、ブラックどころじゃねえ環境で、(狡)賢く凶太く生きていく。そんな話！

ストーリーは最後まで行きます。ネタバレに注意してね。

目次

転生第一	1
仕事第一	16
迎撃第一	32
交渉第一	47
休憩第一	62
探索第一	81
好機第一	97
突破第一	111
RANK1 ペニーウォートは利益第一	

RANK 1 ペニーウオートは利益第一
転生第一

.....

.....

.....。

┌──────────┴──────────┐

こえが、きこえる
だれかが、みえる

とても、さむくて、ねむくて

ああ、そうか

おれ、しぬのか

……

……

……。

………ん？

アレ？なんだコレ

空が真っ白だ。

アレ？

真っ白なのは俺の方じゃないか。

アレ？

なんで俺こんなところで寝てるんだっけ。

アレ？

こんなん前にもなかったっけ？

アレ？

これ転生だわ。

～数分後～

突然赤ん坊になっていた事実をなんとか飲み込んで、覚えていることを整理した。

俺はどっかの企業に勤めてた社員で、優秀とか有能とか、出世間違いなしとか言われていたが、俺自身はそんなものに興味はなくて、忙しそうで忙しくない。ただ今の平穩が続けばいいやと思っていた平社員だった。

仕事は早く終わるけど、俺のペースでこなしまくっていると昇進の話が来そうだったので、期限ギリギリまで報告とかはせず、サボることにした。

その間の暇つぶしにハマって、仕事を早めに終わらせては報告せず、資格取りにいっ

たり、最新の携帯ゲーム機買いに行ったり、上司とか取引先とかリサーチして、弱み握って強請ったり、機嫌を取ったりして、サボる時間を増やしていた。

上からはいい顔されてなかったけど、同僚や後輩からは慕われてたっけな。まあ俺が上司の弱み握ってたから、ミスとか見つけたときにフォローしてただけなんだけどね。

昇進した後輩にメシ奢って貰ったりもしたっけな。誕生日サプライズなんかもされたっけな。アレ久しぶりに泣いたわ。マジで。

それで……確か外回りしてるときに………なんか見つけて………。

そこから先が思い出せない、というか、平社員って言ったけど、企業の名前が思い出せん。というか社員の顔と名前も思い出せん………！

ていうか、俺、名前何だっけ!?

………。

で、えーと、突然の死を迎えて、転生したと。

———納得できねえよ!!?!

何で有無も言わず転生させるんだよ!!フツー神的なのが現れて「お前死んだけど転生できるよ、何欲しい?」ってワンクッション置くものだろ!!

記憶？記憶はいいや、生き返ったことがわかればそれで。

ハア……で、転生って言えば異世界転生なんだろう、きつと。この部屋見た目が普通っぽいけど、どんな世界なんだ？

病院……ではないな。多分孤児院だな。

生まれてすぐに親無しかこの子……可哀想に。俺のことですけど。

あ、そうだ。こういうベッドには赤ん坊の名前のついたタオル的なのが置かれて、これだな。タオル的なの。

バサツと。やだアタイ裸んぼ。まさに生まれたままのすが……

……

……

息子が消えてらつしやるウウウウウウウウ

!!!!!!!

〳数年後〵

.....

.....

.....。

「おい、行くぞ」

.....。

「.....どうした？ぼーつとして、悪い夢でも見たのか？」

「.....夢は飯が食えないから嫌いなんだよ.....」

朝一でぼやきつつ、おはようございます。イケメン幼なじみ（年知らんけど）のモーニングコールでパーフェクトなレム睡眠から覚醒した私は大きく欠伸をしながら体を起こした。

——ライン・ペニーウオート

それが私の名前。

この世に生まれた時から天涯孤独の身として孤児院で育ち、ハエもたからないような薄汚え大人たちに最安値で買われて、イケメン幼なじみ……あ、そういえば年上だった。えー、「ユウゴ・ペニーウオート」と共に「AGE」となり、色々頑張って今日まで生きています。

主に「灰域」で宝探しして、たまに「アラガミ」やつつけて、飯作ったりサボったり、看守共りサーチして強請ってサボったり、住み込み（牢獄）で休む暇なく働いている。ブラックなんてもんじゃねえぞ！

「くあああ………あー、昨日飲み過ぎちゃったな……」

「昨日くすねてきたって言ってた酒か？まさか、もう飲み干しちゃったのか」

「男にはな、飲まなきややってらんねえことがあんのよ……ユウゴくん」

「いやお前女だろ」

——そうだよ!!生まれ変わったらご子息を奪われてた哀れな少女だよ!!チクシヨウ

!!お前の単装砲を連装砲にしてやろうか!!

そんな暴言が喉元から出かかったけどなんとか飲み込んだ。私えらい。

シャキツとしろよ、と一喝して、ユウゴは次の仕事のことを話はじめた。

さらに濃い灰域に行くことになったそうで、そろそろオシマイが近いって話だった。灰域は濃い場所程命を脅かす、人間だと10分も保たないんだとか。

「ホント飽きずに無茶な注文してくるよねーマジで」

「仕事ができなくなつた俺らを、ミナトの連中が甲斐甲斐しく世話してくれるとは思えない。上の連中は口減らしがしたいんだろうよ」

「そしたらまた最安値でA G Eを加入、と、人の出入りが激しい典型的ブラック企業あるですわー」

サボりの合間にやつてる調査によれば、このミナト「ペニーウオート」は特にA G Eがいなくなりやすい、消耗品扱いなのだ。ここは利益第一主義、損耗なんて気にしやしない。

「おつかしーなー、こないだ謎の横領と損害で赤字続きになってるって聞いたから、そんな余裕ないと思うんだけどな」

「なんかお前の周りだけ環境良くなつてると思つたら……!」

ユウゴが興味を持ったところで、私の寢床紹介します。普通にお布団が敷いてありま

す。快適！

傍には箱詰めのお菓子と飲み物と、灰域で拾ってきたレア物の山が目立たない程に置いてあります。S O i t c hもあるよ！S O i t c h！過去の遺産つて素敵！たまに子どもたちとお菓子食べながらおすそ分けプレイして遊んでるよ。

他にも薬とか保存食とか横流ゲフンゲフン、お歳暮の品とかも――

「……横領か？」

「違うよー、これはアレだ。在庫処分を頼まれてだね」

「それを横領つつーんだよ！ホント懲りねえなお前！」

かれこれ58回目です！懲罰房はお友だちだ！

「でもこうでもしないと、私らが働いた分と釣り合わないでしょ。おあいこだよ」

「ツ………！ だとしてもだ」

隣に座ってたユウゴが立ち上がり、元から険しい顔がさらに険しくなる。

「お前にそんな方法で稼がせたくはねえ、そんなことでしかA G E俺たちが生きられないなんてこと、あっちゃいけねえんだ」

「……まあ、そりやそうだけど」

A G Eは一応、「アラガミ」っていうバケモノと戦う「ゴッドイーター」という存在。目には目をつけてことで、アラガミの「オラクル細胞」を取り込み、これまたオラクル

細胞を利用した武器「神機」を使い、これを以てアラガミに対抗する。

で、A G Eはそれらに加えて、灰域に適応できるように特殊なオラクル細胞を取り込んでいる。そのせいで、ゴッドイーターというより、アラガミに近い存在になっているため、結構扱いがヒドイ。まるで凶暴な動物かなんかを都合良く使っている感じだ。

その証拠に……この繋がった腕輪よ。ゴッドイーターには必要なこの腕輪。A G Eは色々な関係で二つ腕輪がある。A G Eを封じ込めるには丁度よく、腕輪同士が繋がるように作ってある。

「まともにやったってねえ……ま、この仕事自体まともじゃないけども、ほとんど利益持ってかれるわけだし」

「だからってやっていいことじゃねえだろ。これ以上看守共にいびられるようなことするな」

「向こうの出方次第だねそれは」

「……お前はいくら懲罰しても足りないかもしれないが、ガキ共はどうする」

あーヤダ。またこのパターンのお説教だよもう。こんな時は、

「……強請るネタが5、6個程」

「ハッハッハ、なら安心だな」

よっしゃ神対応で説教回避だぜ――

「——でも言うと思ったかアアアア!!」

「——ア、————!!うら若き乙女に対してバックブリーカーってお前!!」

「うら若き乙女がそんなもん思いつくなアアアア!!」

AG E式バックブリーカー。

相手の首、足なら太もも辺りに腕輪を通して肩に担ぎ上げ、クラッチして背骨をメリメリする。痛い。

無造作に床に投げ出されて、背中を強打。あとも頭打った。痛い。で、すぐ胸ぐら掴まれて起こされる。

「お前の軽率な行動のせいで他の仲間やガキどもの負担が増えるんだ!」

「お前のバックブリーカーもな。ほらタンコブできた」

「コイツらだって——お前がミナトの財政難を煽らなければ……!いなくなったりしなかったんだ!」

ユウゴが私に、いくつか輪っかがついた腕を見せてきた。

かつてこの部屋にいたAG Eたちのものだ。実際にいなくなったAG Eはもつと多い、でもせめて同じ部屋のヤツらだけでもと、いくつか譲ってもらい身につけている。

いやでもね、形見じゃないのよ。これは。

「いや、言うてみんな売られただけでしょ?それにここよかヒドイミナトなんてそうそ

う無いし？ちよつとはマシな生活できてるんじゃない？」

「お前……ッ！」

「いつも言ってることじゃん、ユウゴ。『生きてりやなんとかなる』——つてさ」

言つてやつた瞬間、ハツとして、ユウゴは言葉を詰まらせた。

私がここに来てから、A G Eの死亡、行方不明者数は劇的に少なくなつて聞いた。それに関わらずペニーウオートの売り上げは激減。

持つてるものがA G Eしか無かつた上の連中は、囚か撒き餌にするはずだったA G Eを売り飛ばすことで、なんとか倒産をしのいでいますとさ。

うん、図らずも——全部私の仕業だ！

A G Eがいなくなる原因を探つていつてわかつたのが、さつき言つたように意図的に処分されているのが大半ということ。ユウゴはそれをずっと憂いていた。そこで私は考えました。

——使い捨てが出来なくなる状況にすればいいのでは？

隙を見てはペニーウオートから金になるようなものをみーんな他のミナト行きの船か、灰域、牢獄に持ち去つて、あと発注書とかにいらんもん書き込んで散財させ、他にも賃上げ要求とかボーナスとか、何度か強請つて実現させた。その結果もの見事にミナトは財政難に。優劣問わずA G Eは売られていった。——誰一人死なずに。

ちなみにこれ実行したの12の時ね。

もちろん私はバレてヒドい目にあつた。でも、今使えるヤツを減らしている場合じゃないと判断され、死ぬ直前まで痛めつけられて、生かされた。

その時ユウゴやジークが必死に看病してくれてたの思い出すなあ。その後ユウゴにもバレて怒られたけど。

まあそんなことがあつて、今ペニーウォートは赤字継続中で、迂闊にAGEを減らしたり出来ないわけです。

会社がどのようにして儲けるか私には手に取るようにわかるからね、ゆえに会社の潰し方もわかるからね！伊達に有能社員って呼ばれてないからね！

しかしユウゴの顔は険しいままだった。ナンデ？

「……たとえコイツらが生きてたとしても、俺はお前のやり方を認めねえぞ」

おおう……今日のユウゴは引き下がらないな。よっぽど虫の居所が悪かったようだ。

確かに、ね、これが一番良い方法かって言われると肯定しがたいよそりや。見ようによつちや仲間を蹴落としたのと変わらんし。

ただね……私も一応覚悟を決めて実行したわけだから、これが間違つてると思いたくない。

「……私がやらなかったら、どんだけ仲間は死んでたと思う？あの時はああするしかない

かつたんだよ」

「……………」

理解できるけど、納得できていない。そんな様子でユウゴは歯噛みした。

隷属的な扱いを許容しているような私の振る舞いを、ユウゴは許していない。あつちは人として生きる権利が自分たちにはあると考へてるからね。でも——虫ケラみたいに弱つちかつたあの時の私らには、なにもできなかつた。唯一希望があつたのは、このミナトから出ること。

私はそれに賭けたわけだ。

「——フン。それでお前が仲間を守つたつていうんならそれでいい。だがな、責任はきつちりと取ってもらうぞ」

「え、何、コイツら生きてたら結婚しろつての？逆ハー作れつての？」

「マ・ジ・メ・に・聞・け……………!!」

「サーセン」

私を強制的に黙らせて、ユウゴは告げた。

「俺の夢見る『明日』に、地獄の底まで付き合つてもらおう。辿り着いて、もしコイツらに、生きて会えたら、遠慮無く殴つてもらおうからな。」

——その時まで、生き抜け」

……ハハ、こいつめ。素直じゃねえなあ、全く。

そんなこと言われたんなら、笑ってこう答えるしかなからうよ。

「いいのかな？私はどんなこととしてでも生き抜くよ？」

「上等だ。それぐらいやつてもらわないと困るからな」

そう言つて、互いに腕輪を差し出して、ぶつけ合う。私とユウゴの、ハンドサイン、つーんだっけ？そんな感じの合図だ。

「こんな感じでやる気も出たし、今日も一日！がんばるぞ——

「あ、でも横領とかすんなよ」

「えー、今度レクチャーしてほしいって他のチームの人から頼まれてるんだけど」

「ハツハツハ、お前ってヤツは。」

「いや本当に——お前ってヤツはアアアアア!!」

「——ア——ア——!!ギブ!!ギブ!!」

「オイうつせーぞ!!懲罰房に行きてえのかテメーら!!」

——結局、良い感じの誓いを立てたその日は、懲罰房の中で過ぎ去りましたとき。

仕事第一

「ケホツ……ケホツ……」

小さく咳き込む声で私は目が覚めた。寝返り打って聞こえた方を見ると、

「あ……お、起こしてゴメンね」

あつぶな、時間見たら仕事の開始近かった。あとシヨウが口元を抑えてた。ここで働かされてるちびっ子AGEの一人で、ちよつと病気がちな男の子だ。

「いや、ちようどいい時に起きた。ありがとねシヨウ。背中痛くて懲罰房で寝れなかったからさ」

「あんなところで寝る余裕あるんだ……？」

余裕あるどころか、よくサボりのために忍び込んでます。あそこ人来ねーからうつつけなんだわ。

よつこら、しようたろう。

起きて周りを見ると、子どもたちしかいなかった。ユウゴとジークはどうしたのかな。確か懲罰房から戻った時には、ジークは……いたにはいたけど、そんな時寝てたから聞けなかったっけ。

「ジークはさつき出て行つてね、ユウゴがまだ戻ってきてないんだ。昨日なにかやつたらしくて……看守が怒つてた」

「ふーん？」

シヨウの声を背中で聞きながら、目線を部屋の出入り口に立つてる看守に向ける。

アイツなんか知つてそうだな、仕事行くついでに訊いてみようか。

「ハイ！そのこの社畜ウ。ここ一週間そこに立ちっぱなしらしいけど懐と下半身潤つてるウ？」

「喧嘩売つてるのか貴様」

あゝこれは溜まつてるヤツだわ。立ちっぱなしな上起ちっぱなしなんだな。今度賄賂として秘蔵本置いたろ。

「ユウゴ、いやハウンド2が帰ってきてないみたいなんだけど、なんかやからしたの？」
「お前たちに話す義務は無い、さっさと仕事に出ろ」

「妻帯者であるにも関わらず違う女性と連絡を取り合つてる姿が目撃されているようですよが何か言い分は——」

「別働隊に不必要な接触を行ったとして契約違反で懲罰房にいる！」

なるほど、私と入れ替わる形で懲罰房に行つたのね。こつそり食べてたお菓子の食べカスに気づきませんように。

んー……で、別働隊つてのは多分、囀にされたチームのことなんだろうな。やつぱり赤字から立ち直りつつあるのか。それでユウゴのことだから、そいつら助けちやつたんだな。

……つーことは？今日、私一人で、仕事？だつる。

この子ら連れつても問題ないけど、あんまり長く留まれないし……。行くなら『あそこ』がいいけど、人数が心許ない。

「はあーあ、誰か丁度よくここに放り込まれるヤツいないかな」

「はあく終わつた終わつた……ずっと座つて作業してたせいで体バツキバキ……。今日はもう寝てよつと」

「看守、仕事行くから全員出して」

「いや勘弁してくんないかな先輩!？」

ハツハツハツハ！このタイミングで戻ってきた己を恨めえ！

～移動中～

旧市街地は繁華街、の、外れにやってきました。

そこにはでつかい窪地があつて、そこを探索地として目指しているわけです。で、今降りてる途中。

「ほら頑張つてキースー、シヨウたちもう降りてきてるよー?」

「無茶言うなつて!こんなところ降りれるの先輩しかいないじゃん!てかシヨウたちは先輩が抱えてたから降りられたんじゃない!俺にも頼むよ!」

「いや、体なまつてる人に情けはかけない主義だから私」

「鬼畜にも程がある!!」

こんなところで時間を食うわけにもいかなかったので、キースも運んで降ろしてあげた。10メートルとちよいくらいの高さだから、いけると思っただけだなあ、ダメだったか。

窪地の端から中心に向かって歩いて行くと……おーいたいた。ここの住人共だ。多いね。

「ツ……アラガミ……」

ちびっ子AGE、リルが私の後ろにしがみついてくる。マールとシヨウも、キースの後ろに隠れた。

私らの目の前にいるのは——アラガミの群れ。

主にオウガテイルと、最近増えだしたアックスレイダーって種類。打たれ強くて突進がウザい。ぶつちやけ死すべし。

「ちよ、ちよつと先輩……！何やってんの、早く神機……！」

「あー、心配しないで。ここのアラガミは特殊だね」

そう言つて一番近くにいるオウガテイルに歩み寄つてみる。その時離れたリルが小さく声を上げたけど、オウガテイルは何もしてこない。

こちらに気づいて顔を向けるくらいはしたが、襲つてくる様子はない。

でも、みんなまだ怖がつてたから、今度は触つてみた。きゃー！つてちびつ子たちは悲鳴を上げたけど、私は別に何ともない。それどころか、オウガテイルはさわりどころがよかつたのか、もっとやってくれ、と言わんばかりに、少し私に体を寄せてきた。

安心してください、襲つてきませんよ！とメッセージを込めて、キースたちに向かつて親指を立ててウインクをしてみせた。

「は……う……え……う……せんぱつ……これ、どういうこと……？」

……まあそうなりますわな。人類の天敵とさえ謳われるアラガミが、こんななんだもの。誰だつてそーなる。私だつてそーなる。てか来た当初そーなった。

数分後、別のところにいたアックスレイダーに恐る恐る近づいて、指先でちよんつて

をつついてみたキースに続き、マール、シヨウ、最後にリルがアラガミに触れてみる。私
がやって見せた時と同じく、本当に何もしてこないと安心したちびっ子たちは、今アラ
ガミたちと戯れている。とりあえず私は「ほどほどにね」と注意して、少し離れたとこ
ろで見守つてます。

キースはすぐそこで休んでるよ。本人曰く驚くのに疲れたらしい。

「で？ここにっつて一体なんなのさ。えらくアラガミが大人しいけど」

「……もぐもぐ……ゴミ漁りをしてたら、迷い込んで落っこちちゃって……もぐもぐ、ア
ラガミいっぱいいたけど、一匹も襲つてこなくて。ごきゅつ……それから何度か来て調
べてみたら、みんな同じモノしか喰つてないことがわかつて。ゲッフ、あ、失礼」

「うん。遠足気分でここに來てるよね先輩」

「この至る所に、ゴミ山があるのがわかるでしょ？」

「うん。まずよくこんなところでご飯食べる気になれるね先輩」

自前の弁当を貪りながら、お箸でそれらのある場所を指した。

生活で出てくる家庭ゴミの類い、廃棄された機械類、医療器具類、その他訳わからん
ものが入り混じつて、所々で山積みになっている。それらは決まって、この窪地の端に出
来ていた。しかもこれ、最初来た時より少しづつ増えていつてるんだよね。

「この辺りのミナトから出たゴミが、みんなここに捨てられてるみたいなのよ。不法投

棄場つてワケ。で、たまたまここにいたアラガミたちは、そのゴミを喰つて生きてる。でもゴミは喰われて減るどころか、徐々に増えていつて、それに伴つて他のアラガミを捕食するアラガミが減つていつて……」

「ああ……なるほど、つまり、エサが文字通り腐るほどあるから、凶暴性が無くなつたつてことか……」

ゴミ処理つて割りとお金がかかるもので、どこぞの島国だと、年間で二兆というところでもない額を叩き出していたらしい。それは灰域に囲まれたミナトであつても例外ではなく、費用をケチつて溜め込むと虫が湧いたり、悪臭が立ちこめたりする。かいつて灰域にでも埋め立てようものなら、今度はアラガミが湧き始めるし、「グレイプニル」がそれを許すわけが無い。

それで、こういう人目につかず、目立ちにくい場所に、みんなこつそり捨ててるわけです。廃棄目的でわざわざ灰域踏破船を使つて来た連中もいたくらいだから、ホントに深刻な問題なんです、が。

「しかし皮肉だねえ、何よりも金をかけて作つたはずのゴツドイーターや神機はアラガミを倒しきれないことが多いのに、何よりも金がかからずに生産できるゴミで飼ひ慣らしてほぼ無害化出来ることに誰も気づかないとか。この閉鎖環境があつてこそ実現しているとはいへ、人類の端くれとしては苦笑いせざるを得ないなwあつはははw wウ

WケWるWWW」

「いや思いつきり満面の笑みで笑ってるじゃん！てか苦笑どころか笑えないからねこれ！」

あー腹いてー……W

さて、昼休憩も終わったことだし、お仕事始めますか。

「はいみんなしゅーごー、ここでの作業時間は短いよー急いでー」

「？　ここアラガミも襲ってこないし、ミナトからそんなに離れてないし、別に急がなくても……」

「いや、ここ中型以上のアラガミの餌場だからさ、長居していると高確率で出るんだよね」

「それ先に言っておエエエエ!? 思わずのんびり過ぎしちやったじゃんかアアアアア！」

キースくん、私が言ったのは、「ここのアラガミは襲ってこない」ってことのみ。安全とは言っていないよ？

ちびっ子たちを集めて向かったのは、破棄された機械類に囲まれた所の、何度か訪れてちびちび作った作業場。まだ使えそうな道具や工具、部品を集めて、『あるもの』を組み立てるためにこしらえた所だけど、それ以外に直せそうなガラクタとか、状態の良い

なんかのパーツとか、売れば金になるものを集めて置いている。

『あるもの』以外に知識が無かったから置きっぱなしになってたけど、キースならなんとかできそう。

で、ちびっ子たち全員連れだして何をさせたかったのかというところ——

「壊れた端末。これを探して欲しいの」

「……？ ミナトで見てるものと違うね」

私が見せたのは、ヒビの入った手のひらサイズの携帯端末。軽くて持ち運びに優れて、あらゆる機能を搭載している便利な代物だったけど、今や時代遅れとなった悲しき機械である。

「これは古い機種だからねー、この辺りは容赦なく古いものが捨てられてるんだわ」

「これを集めて何するの？」

「このままでもいいけどね、中に入ってるものが特に売れるんだよ」

そう言っつて私はラジオペンチを二つ用意して、見せた携帯端末を割ってみせ——みせ……み……みせオリヤア！

割りと力が要った……。で、割れた断面から露出した基板を抜き取ってみせた。

「——これを買うとる輩がいてね、これには今じゃ採取が難しい金属が微量ながら含まれてる。そういうものがこういうゴミ山に多く存在することから、昔は『都市鉱山』な

んで呼んでたらしいよ」

「すっげえー！じゃあここ、宝の山ってことじゃん！」

マールがはしゃいで飛び跳ねる。でもなー、そう甘い話でもないんだよなー。

そんなマールにキースは肩を寄せて囁いた。

「気をつけてマール……先輩のことだから絶対うまい話じゃないと思うよ……」

「勘が良いな、キースくん。その通りだよ」

「ついさつき思い知らされたばかりだからね！」

はい、と言って大きめの箱をちびっ子たちの前に置いた。既に私が集めた基板が数十個入ってるけど、これじゃ全然足りない。

「これを満杯にするくらいじゃないと買いとって貰えないらしくてね」

「満……!?!」

「端末600個くらいあれば足りると思うんだけど」

「そんなに見つけられるか！」

キースが叫ぶのに次いで、ちびっ子たちもふるふると顔を横に振った。

あー、やっぱり無理か……手分けして探せばすぐ集まると思ったんだけどなー……え

? 見通しが甘いつて? いやーじゃん別に。

「はあ、いつものゴミ漁りよりかは、難易度低いと思ってたんだけどなー」

いつもとおなじゴミ漁りでも、今日はなんだか楽しく思えた。やってることは変わらないけど、みんなの顔がいきいきしてる。こんなの初めて。

キースはラインの集めたガラクタを楽しそうにいじってる。仕事でやってるのより、やりがいていうのがあるみたい。

マールは、ここのアラガミとすつかり仲良しになってる。マールが餌のゴミをあげると、必ず背中に乗せてくれるの。えづけ？っていうんだって。重いものも一緒に乗せてくれるから、運ぶのがとつても楽なんだよ。シヨウは無理して自分で運ぼうとするから、シヨウも乗せてもらってるよ。

ラインは……ラインはちよつと泣きながら、集めたゴミから「きばん」を取り出してる。「お仕事つらいの？」って聞いたたら「自分のアホさがつらい」って言った。……正直、何を言ってるのかよくわからなかった。

「先輩、機嫌直してってばー、発想自体は良かったんだから。それが役立ったって思えばさー」

「……あつちやならないんだよ……私の提案が、踏み台になるようなことなんて……」
「さらつとヒドい言い方するなあ……」

「聞きかじった程度で……もつと、もつと調べとけば……およよ……」
「どんだけ自分の手柄にしたかったんだよ……」

………やっぱりよくわからないや。ていうか、これはわかったらいけない気がする。

「みんな、作業中断。一休みしようか」

『は〜い』

一休みつて言われたけど、何もしてないと、なんだかむずむずする……。何とか誤魔化せないかなくて、ゴミの山を眺めながら歩いてみた。

そしたら――

「……？」

パリパリつて、何かが割れる音が聞こえてきた。少し耳を澄ましてみる。

「――！」

また聞こえた。ゴミの山の方から……？ちよつと怖い、けど、このまま離れるのもなんだか怖い……。

少しずつ近づいて、大きなガラクタに隠れながら、そつと様子を見てみた。

そこにいたのは、横たわってる一匹のオウガテイルと――白くて、丸いもの。それが動いてる音だった。

白いものにはヒビが入っていて、動くたびに割れていく。

「……もしかして……『たまご』……?」

ラインから聞いたことある。

「どう料理してもだいたい美味しく食べられる便利な食材」

「ご飯にかけると三食それでいける」

「目玉焼きの黄身を潰すやつは滅べ」

「ちくわ大明神」

「有精卵は温めると子どもが生まれる」……

……じゃあこれは、ゆーせーらんなんだね。

それでこの子は——お母さん?お父さん?——に見守られながら、生まれようと頑張ってるんだ……。

「——ピー!」

「……!」

出てきた……!頭に殻が乗ったままになってる……かわいい……。

……こんなの見ると、アラガミが違う風に見えるちやいそう。あんなに怖くても、こ
うやって生まれてくるんだね。アラガミがみんな、こんなだったら、怖くないし、怖が
られることもないのに……。

ラインはこの子たちのこと、特別って言った。ずっとこの中で生きてるから、とつ

へ……? おかあ、さん……?

『ガアアツ!!』

『G I——?』

だめ、にげなきや、たべられちゃうよ。

『ガアアア——!!』

だめ、待って——!

『G I I I I——!!』

——オウガテイルのお母さんは、鳥の顔のアラガミに飛びかかったけれど、いとも簡単にね除けられた——。

迎撃第一

休憩中、集めた基板の量を確かめてみた。うーん、控えめに言つて予想を超えてる。隣の山積みになつてる基板の箱を見ればわかる。どんだけ捨ててんだ。箱二つ埋まるぞオイ。

「限りある資源をいとも容易く捨てられる人類の心情がわからん。灰域とアラガミに食い尽くされるより先に資源不足で自滅しそう……全人類アラガミにでもなつたら解決するかな」

「何か怖いこと言いだしたこの人!？」

青ざめながらこちらを見るキース。

「そーいや紹介し忘れてたけど、キースは機械いじりとかが得意なジークの弟だよ。」

「潜航灰域濃度レベルが低い代わりに、技術屋として活躍しているよ。」

「いやいや、現実から目を逸らさず考えてみ？ 減り続ける物資、汚染されていく土地、どう考えても全滅は免れないっしょ？ だつたらそんなでも生きていける道探すのって自然じゃね？ 故にアラガミになるしかなくね？」

「いやどつちにしても全滅してるから！ 本末転倒もいいところだから！」

「ものは考えようだよ。元・人間だったっていう事実があれば全滅ではないではないと思っ」

「だからそれ全滅してるんだってば！なにそのイカれた悪役みたいな考え方!？」

「下らん！正義だ悪だなんてものに答えはねえんだ！」

「そのアホ理論に意味は無いって答えはあるけどね！」

キースはひとしきりツツコミ終えたところで、ため息交じりに口を開く。

「そんなこと口に出してると、余計に奇異な目で見られることになるよ？気を付けなよ」

「表現に関して規制感じますねー」

「規制以前の問題なんだけど」

「そうかなあ、よく他のAGE達からは「変わってる」とかよく言われるけど、私そんな変な事言ってる自覚ないし、思ってることが自由に話せないってのが性に合わないっていうかー、口に出さないと気が済まないというかー、気がつくと懲罰房にいましたー、みたいなの？」

「何が言いたいかというとな、私は普通に話してるつもりなの。なにも特別なことではないの。……まあさっきの人類アラガミ化はさすがにどうかとも思いますけども。」

「……問題と言えばキース、昔よく耳にした『暴君』って呼ばれてるAGEどうしてるんだらう」

「暴君……？聞いたことないなあ、なにそれ？」

「伝説のAGEだよ。今日まで強いられてるAGEの隷属身分に抗った、一番最初のAGEって言われてる」

『暴君』――。

E。存在していそうで存在していない、少し存在していると噂されたクツツソ強いAGE。

過去最高傑作のAGEと言われており、適合試験で手に入れた怪力で、繋がれていた腕輪の接合部をねじ切った程の力を持つらしい。

その際に逃げ出して以降、傘下を増やして各地のミナトを襲撃し回っていたとされる。

枷から解き放たれた猛獣が如く、全てを欲しいままに暴れ回ったその様から『暴君』の異名が付けられた。

目撃情報は多々あるが、なぜか写真媒体が存在していないため、実在しないのでは？と考える人もいるが、略奪行為自体は実際に行われていたため、それに対しグレイプニルが煮え湯を飲まされていたのは事実である。

「AGEが開発された初期の頃は、そりやあもうそいつらの反発がヒドかったらしくて、他にも『獄王』、『魔神』、『夜叉』とかの異名持ちのAGEが、グレイプニルに楯突いて好き放題してたらしいよ」

「へえ、そんな連中がいたんだね。今は音沙汰ないみたいだけど」

「ほとんど取り押さえられたからねえ、『暴君』だけは捕まってなかったんだ。けど7年前くらいから情報が更新されてなくて。どうなったんだろ」

「ふーん？ ずいぶん詳しいね先輩。好きなの？ そういうの」

「んー、まあそんなところかな」

……ホントはペニーウォートから逃げ出す手段として、このAGEたちになんとかしてここを襲わせられないかって足取りを探ったら、詳しくなっただけなんだよね。

ホントに来たら来たで、こっちの命の保証はしかねたけど。特に暴君。

「……？」

ふと、妙な静けさを感じて窪地の中心の方を向いた。

見えたのはアックスレイダーたちと遊んでいるマール、オウガテイルと一緒にうたた寝をしているシヨウ。

——リルの姿だけそこにはなかった。

「キース。みんなを集めて」

『——キイ、キイ!』

あつ——あの子が……!!

『GG……』

『キイ! キュ!』

ダメ! そのアラガミはあなたと違うの! 近づいちゃダメ!

そんな願いが届くはずがなく、鳥の顔のアラガミは、火の玉を子どもに叩きつけようとして——

『G A A A——!』

『——ガルアアア!!』

——ツ!? オウガテイルのお母さん——!

生きてたの!?

あと少しの所で嘔み付いて止めた!

『G O O O O ! ? G A A A ! ! G A A A——!!』

『……!!……ガウ……!!』

死に物狂いで食らいついてる……!!

……もしかして、あの子を助けようとして——?

『G A A A A A A A——!!!』

『ガ——』

鳥の顔のアラガミは、嘯み付いたままのオウガテイルのお母さんを、力いっぱい壁に叩きつけた。それでも、お母さんは、アラガミに食らいついたらそのまま離さない。

何度も、何度も、どんなに攻撃されたって、お母さんは怯まない。

——と、その途中に、私と、お母さんの視線が合った。

一瞬だったけど、たった一瞬なんだけど、私に、何かを訴えかけてた気がした。

「——っ……！」

そうだ——今なら、あいつがお母さんに気を取られている今なら……！

私は迷うこと無く、足を踏み出して——

「——行こう！」

子どもを抱えて、みんなの所まで駆けだした。

振り向かずに、でも……ただ一言呟いて。

「……（ぐ）めんなさい……！」

ゴミの山を抜けると、こここのアラガミたちの群れと、その中を走る人影が目に入る。そして、私を呼ぶ声も聞こえる。

「リル————！！どこ行っただ————！！お————い！！」

「ライン——！」

その時、後ろから、とてもイヤな気配を感じた。あいつが——来る！

「逃げて——！！」

私が叫ぶのと、周りに炎がまき散らされたのは同時だった。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

「ヤツバ——！」

リルの声が聞こえたと思ったたら、ゴミ山の一角から火災が発生しよった！この火力……クアドリガでも入ってきたか……!?

とにかく炎の上があった方から「逃げて」って聞こえた。多分そこだ！死んでんなよ、リル！じゃないと私（の背骨）が死ぬ！

「——ッ、いた！」

けどなんか——うわぁメンドーそうなのいるうう！」

挑発フェロモン。飲むとアラガミからのヘイトを稼げる、効果てきめんだね。

「ほらこつちだ！こつち来い！」

神機を振り回しながら、窪地のひらけた場所に向かって走った。鳥頭も私に倣うように付いてくる。

ここでまた火を放たれると、ゴミ山に移って燃え広がる恐れがある。可燃物多いからなあ……：……そうなりやこは火の海だ。アラガミたちはともかく、私らは普通に焼けどぬから！

絶対に！防がねば！ならん！

銃形態ガンフォームの射撃で牽制しつつ、誘導成功。ここからはとにかく叩きまくって追っ払う。エサにありつけないとわかれば、場所を変えるハズだ。

さて……：……ここは、良い感じのセリフがあると、映えると思いますんで——

「最初に言っておく——お前に食わせるタンメンはねエ!!」

「タンメン!?!」

遠距離ツツコミ、ナイスショットだキース。

と言うわけで鳥頭、今日のアラガミ食堂は閉店だ。とつとと出て行ってもらおう。

キースのツツコミを合図に、鳥頭が短く吠えて突進する。敢えてスレスレで躲すと同時に、神機プレデターフォームを捕喰形態へ変形させて、後ろから——ガブツ！

『G』

バースト状態に移行。ステップした勢いで下半身に一刀、さらにステップして背後から切り上げて跳躍——ライジングステップで空中へ。数回切りつけて滞空しつつ、最後に切り下ろして地面に戻る。

鳥頭がこちらを向こうとすれば、すれ違いざまに切りつけてまた背後へ——。あとは飛んで、切つて、背後に移動の繰り返しかな、パターン入りました。イケる。

『GGGGGG……!!』

「——！」

つと、そうはいかないか。炎を纏いながらあつちも空中に、からのー？

『——G A A ツ!!』

「っ熱……!!」

降りてきた瞬間にシールドを展開して防げたものの、熱気が装甲の隙間から吹き付けてくる。

これは、ストンピング——いや足無いから違うか。着地と同時に炎を衝撃波みたいにまき散らすのね。低射程ながらも、全方位攻撃持ち。意外にも死角が無いな……。

「ン?」

展開したままの装甲の上から鳥頭の様子を見ると、右肩から手先にかけて、複数の歯

形が見つかった。

アラガミはそう簡単に傷つかない、結合崩壊させるのも一苦勞。でもそれは、神機使いでの話。あの噛み跡は——あのオウガテイルか！

「ナイスフアイト」

思わぬフアインプレーに私は、ニツと口角を上げる。すかさず銃形態で鳥頭の右半身に射撃。近接だと範囲攻撃喰らいかねないからねー、少し遠めからチマチマつつく。

あの噛み跡は間違いなく脆くなってる。結合崩壊させられれば、迎撃の難易度はグツと下がるはず。

『GIIII……!』

いいね……噛み跡からヒビが入ってきてる。このままゴリ押しでイける——

『GA——!!』

「んな——」

火の玉が白く変色して——ホーミング弾！数十発のうち5発は私の所に、残りが——ぎゃああああ遠くに行った流れ弾が可燃物っぽいポリタンクに——ぶち当たったアアアア!!

……………。

腕の表面が砕け散ったアラガミは、一際大きく叫び上がると、何度もワープしながら崖の上まで移動して、そこからラインを睨んで逃げていった……。

交渉第一

鳥頭が恨めしそーな顔して退散していく。うまく追い払ったようではあるけど、あ
りやまだ余裕あったかも……。機嫌が悪くなると立ち去るタイプで助かった。

「——はあー全く。何だったんだ今の」

神機を肩に乗せながらため息をついた。咄嗟にスタングレネード投げたのは英断
だったみたい。まさか一瞬で背後取られるとは思ってもみなかった、あんなアラガミも
いるんだなー、気をつけよ。

「……………」

ちらりと、真つ黒になったオウガテイルを視界に入れる。今回のMVPは紛れもなく
こいつだ、こいつが抵抗してなかったら、無傷で迎撃は不可能だった。

「アンタには感謝しかないよ。本当に、お疲れ様」

そんな言葉をかけた途端、そのオウガテイルの体が、徐々に朽ちていき、塵となって
消えた。

……間に合わなくてゴメンな。せめてその眠りが、安らかであることを祈るよ。

のんびり歩いて作業場に返ると……その前でアラガミたちがおしくら饅頭してた。ここが一番安全だつて気がついたんだなー、賢いやつらめ。

仕方ないのでゴミ山を通つて作業場に向かう。そこでキースは落ち着かない様子でウロウロしてて、ちびつ子たちは三人で向かい合つて何かを話していた。

「戻つたよみんな〜」

「先輩！大丈夫だった!？」

「まあなんとか。実は頼もしい助っ人がいてだね……」

私の勇敢な戦闘録を語ろうとしたとき、リルが抱いているものに目がいった。

「リルー？それなーに？」

「……!？」

私の声に、ビクツと肩を震わせた……。

——オジサンなあ！小さい子からそういうのされるとちよつと傷付くんだよ！わかる!？」

おつと生前の素が出るところだった。年齢バレしてしまう、平常心平常心。

少し躊躇つて、リルはその腕の中の、小さなオウガテイルを見せてくれた。

『——キュ、キィ!』

牙は小さくて、尻尾の鬼瓦もない。見るからに幼体のオウガテイルだね。かわいいで

すね……。

「この子どうしたの？」

「……実はね……」

幼体オウガテイルをぎゅつと抱きしめて、涙ぐみながらリルは事の顛末を話してくれた。

生命の誕生に立ち会ってたら、突然ならず者が現れ、母親がそいつの進行を食い止めて「お行きなさい！」ってリル達を逃がしてくれた、と。

——それを聞いて、ああ、そうか。と納得した。

鳥頭があんなことになるわけだよ、そっちは幾ら金積まれようと許さんけど。

「ねえリル。世界で一番危険な生き物って、何かわかる？」

「？……アラガミ？」

「いや、それよりもっと危ないよ」

私の質問に、シヨウも、マールも、キースも、もちろんリルも、みんな首を傾げた。まあ危ない生き物って言っても、このご時世にアラガミ以上にヤベエのなんて思いつかないよな。

「——親だよ。子を守る親、異様に強かったでしょ？この子のお母さん」

「あ……！」

リルが目を見開いた。腑に落ちたみたいだね。

私は生まれてこの方天涯孤独だけど——親つてのは良くも悪くも、子を第一に想うもの。自然界だと尚更な。

子どもが食べ物に困らないよう、生き餌を用意する昆虫とか。強く育つよう、崖から落として上つてきた子どものみを育てる猛獣とか。危険に晒されずなおかつ、安全に成長できるように他の生き物に卵を産み付ける寄生虫とか！

……うん、例えが悪いな。まあ、それ程必死になつてるんだよ。そういうことにしていて。

「うん——うん……！強かった……っ！」

リルはまた、幼体オウガテイルを強く抱きしめて、泣きながら何度も頷いた。

大丈夫だぞリル。お前のやったことは、オウガテイルの母さんの最後の望みのハズだ。胸を張つていいことだ。

「親つて、そんなに強い……？」

「シヨウ、本気出した親は強いぞ。それこそオカンのユウゴとか、兄貴分のジークとか、一家の大黒柱の化身とも言える私みたく、日夜君らに苦勞をかけないようにつて頑張つてんだからね」

「ライン姉ちゃんが頑張つてるところ言うほど見たことないんだけ——」

「はい作業再開ー！もう一踏ん張りだよー！」

「はぐらかしたな先輩」

「うん、先輩灰域行つても基本サボってるよ」

「うるつつつせえぞおんどれあ煮付けにしてヤローカツツツツ?!?!?」

『こっわ』

なんやかんやあつて、基板は結局3箱埋まった。キースの直したガラクタと合わせ、かなりの額が期待できると思う。私たちの稼ぎは基本ミナトの総取りだけど、そこは私、ちゃんと考えてますとも。

実はある看守とコネ持つてましてね……そのつてで買い取り先と取引出来るワケなんですよ。それで基板を買い取る輩を知った私はこの場所を思い出して、今に至るわけです。

ミナトのアンポンタン共だと、大体何拾つてきてもゴミとしか思わない。だから需要のある輩を探して、高く売ることと儲けようつて算段です。もちろん、その売り上げは、コネの稼ぎつてことで片付けてます。

まあ要は……儲け話を持ちかけて、コネのやつと互いに稼いでるだけですな。ミナトに内緒で。

しいよ。印税ナンバーにしてたっけ。

「フーム……」

二度目の休憩で遊んでいるちびっ子たちを眺めた。その中の、歩くリルと、とことこついてくる小さいオウガテイル。

「フー……」

時々リルが振り向いて微笑みかける。その度にオウガテイルは応えるように元気よく鳴いた。

「フー……」

楽しそうだ。とつても楽しそうだ。出会って数時間も経っていないのにとつても仲良しだ。

リル——お前……。

「男を知る年かツツツ」

「ど冗な勘違いしてんの先輩」

「は!!!あれを勘違いで済ます気概がよくありますねキースくん??」
「過保護って行きすぎると奇跡的なバカになるんだな」
!!!??」

「——それ卍固めだ」

「——ぎゃあああ痛い痛い痛い痛い先輩のはホントにシャレになんないからアアアア!!」

失礼極まりないキースをしばいた所で話をしよう。

リルがミニオウガテイル、略してミニガテイルを気に入ってしまった。ミニガテイルもリルに懐いてしまっている。これはちよつと良くない。帰り際に「連れて帰りたい」とごねられるに違いない。だけど、連れて帰るだけなら何ら問題ない。灰域のお宝隠すのと同じ要領で運べば簡単だ。しかし——あんなのがウチに来ようものなら生真面目オカ^ユン^ゴが黙つちやいないだろう、三時間はSEKKYUをされることになる。オマケにマークされて横領もしくくなるかもしれない。最悪バックブリーカー食らわされる——三重苦か!

「……そんな訳で、リル。里親探そう。とてもじゃないけど……その子はミナトには連れて行けない」

「……そつか……うん」

消え入りそうな声で、悲しげにリルは了承した。悪いな……私の背骨の為なんだ。許してくれ。

でもマールが私の説明に反論してきやがった。何だよ、文句あんのかこのヤロー。

「あるよ！リルが親でいいじゃん。それにコイツまだ小さいし、アラガミだつてわかんないつて」

「マール……」

「二足歩行ができる生き物がその辺にいますか？どつちにしろ認められる訳ないぢやないか」

「そんなの先輩が潔くバックブリーカー食らえばいい話じゃんか」

「なんで私がバックブリーカーされれば解決するんだよ！」

「先輩何やつても最終的にそれで済んでるつてジークが……」

「野郎帰つたらぶつ飛ばす！」

同じ空の下で仕事してるであろうジークに向かって叫んでたら、シヨウも挙手して言うてる。

「僕も、この子はリルと一緒にいていいと思う。ユウゴ兄ちゃんも納得させるし、お世話も手伝うから。いいでしょ？」

「おいおいおいシヨウくくく一番まともな君がそんなこと言つちやつてくくくユウゴの恐ろしさを知らないから言えるんだそれは」

「ライン姉ちゃんが怒らせることしかしてないからだと思うな……」

「ユウゴの沸点が極めて低いだけだから！まだ法に抵触するかしないか程度のことしか

してないし私！」

「……これはユウゴ兄ちゃん怒っても仕方ないね……」

「なしてえ……」

シヨウウが厳しい……マヂムリオウチカエリタイ……。

「……いやちよつと待て。君らしいつつつてつけど、リルの意見を無視すんのはどうかと思うんだなー私！」

「うぐ……」

「そ、それは……」

二人とも言い淀んでる。リルはちやーンと「うん」って答えたもんねー。

「……ら、ライン、私やつぱり……!」

まさかの裏切り発生。

「うおーつと手のひら返し早アツ!? そんなに押しに弱いと悪い男に絡まれつぞー!」

「いやライン以上に悪い人なんていないから。余計なお世話。ホントに」

「ウボア予想だにしなかった流れ弾ア!」

「それ流れ弾じゃなくて標準ど真ん中」↑キース

血を吐くようにぶつ倒れた私に、リルは続けて言う。

「私、この子と一緒にいたい!ちゃんと面倒見るし、みんなには迷惑かけないから……!」

だからお願い！」

必死に頭を下げる姿を見て、リルなりに本気だつてことはわかった。マールとシヨウの言い分もわかりますとも、バックブリーカーで解決以外は。

——しかしこちとら元営業マン。ただで注文を受け付けるのはなんか違うんだよねえ。

「そうは言うけどさあ、結局運び込むのも怒られんの私なんだよね。損じゃん私、それに對して何も無いっておかしくない？具体的に言うとお価がない」

「ちよ——先輩!」

「あつ……えと、えーと……」

リルたちがオロオロし始めた隙に、キースが肩を組んで小さい声で訴えてきた。なんだよ、文句あんのか。

「あるよ！何あんなちびっ子たちにたかろうとしてるのさ！」

「なあに、ちよつと試してるだけだつて。しゃかりきになつて動いてさえくれれば、持つてくるものに文句は付けないから。人に物事を頼むのは有料つてことを身につけさせたいんだよ私は」

「だからつて……それじゃいつもの仕事と変わらないじゃんか」

「まままま、誠意さえ見せれば、ね？理想としては泥だらけになつて大きめの金属片でも

持つてきてくれれば——」

振り返ると、ちようどそこに泥だらけになったちびっ子たちと……。

——新品みたいにピカピカの金床が置いてあつた。

「……これは」

「拾つてきた」

「早ない？」

マールがぐいつと頬に付いた泥を拭う。よく見ると、汗まみれにもなつてゐるし、みんな肩で息をしていた。どんだけ急いだの。君らから目離して一分も経つてないよ。

……：……：……：「そういう『アレ』の裝飾を作るのに、ちゃんとしたたたき台が欲しかった所だ。故にこれは、対価にはなつてゐる。」

「ン、ンー、これちようど欲しかったんだよね。よく見つけてきたなあ。エライぞー」

「別に……：……：その辺にあつたものだったから」

いやその辺から出てくるモノではないだろ。なんなら買おうとしたつてなかなか見つからないぞこんなもん。

「これじゃ足りない？」

「そ、そんなことないよ。これで十ぶ……：……：あ、そうだ。はんだごと壊れてたつけ」

「はい、拾つてきた」

「早ない??」

そして当然の如く新品（みたいな状態のやつ）。

「あ、あはは、助かる……ん、そういえば」

「ポリタンクでしょ?」

「早ない??」

これも新品（みたいな（ry

てかまだ喋ってもねーぞ。

「ふう……」

「バッテリーでしょ?」

「早ない??」

とうとう考えるより先に動いたよ!早すぎて未来が見えちゃってない!?

ていうか、これバッテリーっていうか、バッテリーになる前じゃない!?まだ組み上がってたくない!?!組み上がってないどころか加工前じゃない!?!原材料じゃない!?!一周回って私の期待通りになってない!?

「あの一、これ出来上がってないんですけれど……」

「ああ、早すぎて追いつかなかったのかな」

追いつかなかったってなんだよ!?!お前らどこに行ってきたんの!?!

「……せ、先輩」

「キースツ!!ちびっ子たちが!ちびっ子たちが早すぎて困る!何とかしてエ!」

「こっちも……困ってる……」

震える声でキースが指さしてたのは……虹色の、ぐわんぐわん動く枠でできた穴でした。

「……これは」

「ちびっ子たちの生物としての限界を超えた『速さ』でこじ開けたタイムホール。ほら、リルが二人、マールは四人、シヨウは……」

「ギヤアアアアアアアアアアアア——」

ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

「——アアアアアアアアアアアア夢オチイ!!」

「あ!起きた」

傍にいたリルが声を上げる。

そつか……笑い疲れて寝てたんだった。しょーもない夢見てたな。マジで。

「ねえライン!私この子と——」

「……いていいから光速だけは超えないでくれ」

「へ?こ、こうそ……??う、うん!」

じゃないと、この子時空を超えそうな気がしたから降参しました。さようなら背骨。

※特にお咎めは無かったです。

休憩第一

『キュー！キュー！』

……はい、最悪な寝起きからおはようございますグツフウヤメタイタイ。ジャンプしないで。

『キュー〜！キューツ』

「リルク、目覚ましなんて頼んでないんですけど」

「あつ、こちら！」

私の上で飛び跳ねていたそれは、リルに気づいて逃げ出して、部屋の中をしつちやかめつちやか走り回る。

「待—て—！」

『キューー！』

私の腹を踏んでたそれは、小さなオウガテイル。昨日なんやかんやあつて、リルが見つけたみなしごのアラガミだ。アラガミっていつても、産まれてきたばかりの赤ん坊。特に喰うモノを選ばないので、ゴミとか要らないモノなど、同じモノをやり続けければ、味を覚えるだろうから私らを襲ったりはしません。

そう断言できる理由は、こいつを見つけた場所。閉鎖された環境下で、人が捨てたゴミのみを食べるアラガミが住む、深くて大きな窪地。そいつらを発見したおかげで、喰うモノさえ足りていれば、大人しい性格になることがわかった。

……しかし中型以上のアラガミはそこを出入りできて、しかもそいつらを捕喰するので、身を守る為の角とか牙とかはそのまま。大人しくなったとはいえ、アラガミはアラガミ。危険なことは変わりないってことだ……そのおかげで昨日は助かったんだけども。

そしてこのオウガテイルは……孵化してから一日経ちますが、そりゃあもう、元氣なお子さんです。ほら、リルがもうバテた。

「ハア……ハア……ぜ、全然捕まらない……」

「ハハハッ、さっそく持て余してるなーリル」

その様子を見てけらけらと笑うヤツが一人。マフラーしてねえマフラーとヤベー脇の露出が特徴の男子。キースの兄貴、『ジーク』である。

「こういう時は追いかけるんじゃないやなくて、おびき寄せるんだよ。ほーらちびすけ〜」
『キィ?』

ジークが段ボールの切れ端をオウガテイルに見せる。帰ってから色々喰わせてみて、これが特に気に入っているらしい。

『キュツ、キュー』

「来た来た」

「むう……」

「さすが弟持つてるだけはあるな」

午前8時。

やったこと・オウガテイルのモーニングコールで起きる。

あ、今日は非番なんで、一日だらけてる様子をお送りします。

午前9時。

部屋在中、私、ジーク、シヨウ、マール、リル。

「オウガテイルコイツの名前決めよう」

「唐突な上に今さらだな」

「うるせえ決めてないのが悪い」

やること・ミニガテイルに名前付けようぜ。

「よしじゃここに考えた名前まとめよう」

そうやって私が取り出したのは、小さいホワイトボード。黒板でも良かったけどこつ

ちにしました。

まずマールが声を上げる。

「はい！『ガロ』！強そうでカッコイイのがいい！」

ふむふむ。一消火完全燃焼しそう。

次にシヨウ。

「い、『イム』。この子、わりと賢いから、そんな風なのを考えた」

うむ。シルエットしかわからなさそう。

その次にジーク。

「ん〜……『オウガ』とかでいんじゃない？」

「ねえわ」

「なんで俺だけ即答!?!」

「お前のはネコに『ネコ』って名前付けるくらい安直すぎる」

「さすがにそこまでヒドくはねえだろ!?!」

「全世界の子ども達ウン億人が考えたであろう名前だぞ、もうちつと捻れエ」

「普通レベルじゃねえか！　　ってかアラガミに名前付ける子ども達億人もいんの!?!」

「子どもじゃないけど、一部の研究機関だとサンプルのアラガミにたまに付けてるらし

い」

「例えばどんな？」

「『あけみ』とか『ほむら』とか」

「動物園か！」

「んー、今んとこ4つか」

「それ候補に入れんの!？」

で、順序的にリルの番ですが。

「り、『リラ』……」

「決定」

『何で!？』

「何でって何で？」

「何で「何で？」で聞き返すんだよ！」

「これが一番びびつときたからだよ悪いか」

「自由か！」

自由じゃダメなんだなあ。○つを。

「仕方ない、コイツ自身に決めて貰おう」

『キュー?』

段ボールの切れ端を五つ用意して、そこに出てきた名前を書いて、それから一工夫し

て、と。

「コイツが最初に触れたヤツで決定な。これで文句無いでしょ」

「なんか一手間加えなかった？」

「全然」

ちよつと遠くにミニガテイルを配置して——スタート！

『キュー！』

ミニガテイル、尻尾をバネのように畳んで……

………何で？

『キュイーツ！』

「——ドフォーウ?!」

「何でラインに!?!」

クリティカルヒットオオオ！また腹かよクシヨウ！そのまま後ろに倒れて痛つてえ！頭打った！何なんだ今日は！

すると、倒れた表示にポケットに押し込んだあるものがこぼれ落ちた。

『キュツ！キュツ♪』

それに気づいた、というか、狙っていたミニガテイルが、器用にフタを外してそれを舐めだす。ヤツベ。

「なにこれ？……のり？」

「うっわ、リルの考えた名前の段ボールベトベトだ。やっぱり細工してやがったな」

「……ライン！知らない間に色々食べさせたでしょ！」

……………。

『返事が無い、ただの屍のようだ（裏声）』

『キューー！キューー！』

「ウボア！ストンピングやめてエ！」

踏んづけられて、こっそり喰わせていたものがポロポロと隠しポケットから出てきてしまった。アカン。

「……………」

「あ、これ、ね。あの、あははは」

「……………」

「いやあ、そのう、ね、寝てる間に囓られたっていうか」

「正座」

「へ？」

「正・座」

「……………すみませんでした」

やったこと・リルにOSEKKYOUされた。

午前10時。

部屋在中、私、ちびっ子たち、ユウゴ、ジーク。

「結局『リラ』に決まったんだな」

「うん！今度はあみだで決めたの」

「で、コイツは何をやらかしたんだ？」

「リラに無断でおやつあげてたから叱った」

はい、叱られた私です。

『甘やかしません』の札を首からかけさせられた上、正座継続中です。かれこれ30分一歩も動いてません、足が取れそう。

おいやめろ、やめなさいリラ。足に乗るんじゃない。乗るんじゃないアアアアアアア

「最近油っこいのダメになってきた。年かな」

「お前17だろ」

「アレか。料理の油加減また雑になってきてるのか、いっぺん叱りにいこう」

「いや叱りにって、ただのクレームじゃねーか」

「あ？言つてなかった？ここの厨房統括してんの私なんだわ」

「はっ!?おまつ、統括!?!いつの間に!?!」

「いやさ、夜中に小腹が減ったもんで、部屋抜け出して厨房で夜食作ってたら、匂いに誘われてきた料理担当の一人に見つかって」

くくく 回想だよくくく

「あつ……ありえねえええええ!!」

同じ食材を捌き同じ調理器具使い同じ味付けを施した！なのに——この差はなんだ!!俺とお前に何の違いがあるというんだ——ライン・ペニーウォートオオ!!」

「いや、普通に雑なんだよ君ら。量とか火加減が」

「黙れええええ!!この厨房のトップたる私を超える者が、ミナトに存在してはならない……!!僕の料理が一番なんだ……!!小生の飯が一番人に食ってもらえるんだ——!!」

「聞いてないし一人称安定しねえな」

「貴女に勝負を挑みます！理由はもちろんおわかりですね？貴女がこんな料理を作り、

「キャラバンが立ち寄ってるらしいぞ。ミナトを尋ねて回ってる商船なんだとよ」
「こんなところまでご苦労だねえ」

午後1時。

部屋在中、私、キース。

「この腕でうつ伏せはツライな~~」

「……うわつ、体柔らかかつ」

この体、柔らかさに長けてるみたい。反らせると足に頭が届いちやうんです。

やったこと・海老反り。

エビ美味しいらしいよ、エビ。いつか食べたい。

午後2時。

「サボるなら懲罰房だよね~~~~~! S O i t c h L i t e で妖 O ウオツチやろーつと」

説明しよう！この時間帯は急に仕事頼むアホがいる為、オフと決めた日は必ず部屋から抜け出して、懲罰房に隠れてやり過ごしているのだ！

バレルと2日は出られないので要注意だ！（経験済み）

誰にも見つからないように懲罰房に移動して、扉をどーんと蹴飛ばすと、

「——ようこそ。お待ちしていました」

——。

『ザ・ワールド』
「『世界』 時よ止まれツ!!」

説明せねばならないツ！

時よ止まれと言ったが、それに近い速度（体感）で頭の回転数を上げて思考するだけであるツ！

（やれやれだぜ……出会い頭にツッコミに困る事を言うんじゃないよ）

さて、選択肢としては……。

①私は待つてない

②なんかいるウ！

③ お帰りください

④ 誰だテメエ!!

⑤ 待つんじゃないよ……

⑥ こんなことある!?

ど、れ、に、し、よ、う、か、な、か、み、さ、ま、の、い、う、と、お、り、に、し、と、け、ば、な、ん、と、か、な、る、ん、じ、や、な、い、か、な、つと。

………うむ、これでいこう。

『——そして時は動き出す』

「こんなことある!？」

「……？」

首を傾げられたけどこっちも傾げざるを得ないんだよ！そんな特殊部隊みたいなガスマスクの人にようこそとか言われて「誰？」ってなるやろ！そうだよそもそも誰だア
ンタ！腕輪あるからAGEなのはわかるけど！あと声からして年上の女だね！クツソ
ウツツコミの順序がわからん！私ボケる方だもん！ボケ倒す方だもん！これでいいの

かツツコミって!?

「ちよつとお、私ここにサボりに来たんですけど!この際懲罰代わってやるから、出てって欲しいんですけど!」

「突然の訪問をお許し下さい。本当なら、牢獄の中で、数人交えてお話をしたかったのですが……思いのほか監視が厳しく、このような場でしたか、あなた方にお会いすることが出来ませんでした」

「訪問?アンタ、このミナトのAGEじゃないの?」

「はい——」

ガスマスクのAGEは静かに頷いて、言葉を繋いだ。

「——かつて『獄王』と呼ばれていた者です。あなた方をここから、解き放ちに参りました」

……。

……。

……。

「こんなことある!?!」

「あ、今言った方がなんだかしつくりきますね」

説明しよう。『獄王』とは――

数々のミナトからAGEを解放してきた、AGEからしてみれば義賊的存在。他の異名持ちAGEたちと比べるとかなり温厚。

ミナトの牢獄から突然現れては、囚われているAGEたちをまとめ上げて、共に檻を食い破って出て行く。

逃がしたAGEの数はおよそ400。

「牢獄から生まれた王」――でことで『獄王』と名が付けられた。女の人だけだ。

「いやまさか、一斉検挙から逃げ延びていたとは……」

「私の腕輪は、任意で外せるよう細工されています。誰であろうと、私を繋ぎ止められる者はいません」

「それで逃げ出せた訳か、へへ、懲りないねえ〜」

苦笑交じりに肩をすくめる。すると、ガスマスク――『獄王』は静かに口を開いた。

「……あなた方に、解放を強制するつもりはありません。あなた方の意思に委ねます」

「あ、そこは意思確認するのね」

「大抵の方は了承しますが、あくまでも決めるのはあなた方です」

「ふむ」

なら、考えるまでもないな。

「——せっかくだけど断るわ。まだやらなきゃならないこともあるし……それに、出るのは今じゃダメな気がするから」

意外だと思いました？まあ、チビの時だったら感謝感激雨霞で了承したかもしれないけども、もう私らそんなに弱くないし、こつちも準備は進めている。あとは、そう……合理的な理由で出られさえすれば——

「よろしいのですか……？」

「うん。あと悪いけど、このまま何もせずに帰って。予定狂わされたくないし」

「ですが、まだ他の方々が——」

獄王さんが喋ってる途中で、外が騒がしくなってきたと思つたら、乱暴に扉が開かれた。

「——見つけたぞ獄王!!」

『た、逮捕だアー!!』

入ってきたのはグレイプニル所属のゴッドイーターたち。先頭のやつがロングコートのものすごく刑事っぽい格好してる。

……………んっん~~~~~、控えめに言つて親の顔より見た展開。

「…………？」

獄王さんキョトンとしてる。で、ハツとなつて肩を震わすと、繋がってた腕輪を外して、隠し持っていたブーストハンマー（形からしてファイ・ドラジェ系だと思われる）で背後の壁をぶち破りそこから逃走。

ゴツドイーターの皆さんも追えーつて言いながら崩れた壁の穴に突撃していなくなつた。

「…………なにあれ」

襲い来る怒濤の展開に、さすがの私も呆然とするしかなかった。

「やっぱりここでサボろうとしてたか」

「あっ」

呆然としてたらユウゴにバレた。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

「……………ここまで来れば…………だ、だい…………大丈夫か…………？」

「そ、そのようです……あんなクオリティひつくい寸劇で、なんとか逃げ出せたようです……」

「もう！忽然といなくなつたと思つたらあんな所に……！何してたんすか！獄王！」

「……………」

窓一つないあの部屋でお会いしたあの方に、私は懐かしさを感じました。

騒がしくて、訳がわからなくて、まるで……。

（——今日、あなたにそっくりな方とお話したんですよ。あなたと初めて会つた日を思い出します）

まるで……かつての愛人のようでした。彼女とは、またお会いしたいですね。

「ちよ、獄王さん？聞いてます？ちよつとー？」

「？ はい、なんでしよう？」

——つと、ペニーウォートに來た目的を忘れてしまう所でした。確か、取り引きで手に入れたものを受け取りにきたんでしたね。向き直つて、それに目を向けました。

そこにいるのは、数人の幼いAGE。みな怯えきつて震えています。灰域潜航濃度が高いとのことで、売られていたのを見つけて引き取りました。

私は、防塵マスクを外して、彼らに微笑んで見せました。

「——私は獄王。あなた方を、解き放つ者です」

探索第一

あらずじ。

事情聴取をすることになりました。WHY？

部屋で惰眠むさぼってたら呼び出し食らったのが数分前、空き部屋を利用して作られた取調室に連れてこられて数分後、横領仲間……もとい、顔馴染みの看守が入ってきた。

名前は『ケイン』 深く被った帽子と、立派な顎髭が特徴の中年男性だ。

「おう、ライン。お前昨日、獄王ってやつと会ったんだってな」

「会ってたらどうすんの」

「こんなご時世だろ、少しでも治安維持に貢献したくてな」

「情報提供で儲かりたいと顔に書いてあります」

「ハツハツへ、ま、実を言うとそんなところだ」

「しゃーないな、そう呟いていつも着けてるメカミミと小型ディスプレイを外して置いた。」

「これはただのアクセではない。メカミミはボイレコになってて、ディスプレイには録画機能を搭載している。私が集めている強請りネタは、これらから得ているんだよ！」

ちなみに入手元は——色々あつて仲良くなった人から貰つた!

「はい、あんたの欲しいものはこの中に入つてる」

「お得意の盗聴と盗撮か。お前みたいなのがいると、怖くて独り言も喋れねえな——」

「おっと、これに釣り合うものと条件に交換だ」

「ケーツ、お前のそのセリフ、毎ツ回手元にねえもんしか要求しねーから嫌なんだよ!」

「そう言いつつも3回目辺りから用意するようになったよね」

そんなわけでメカミミとデイスプレイの隣に投げ出されたのは、所々にバツ印が付いた地図……。

「は?ふざけてるんですか?こんなわかりやすい子ども騙し流行ると思つていらつしやるんですか?控えめに言つて死ぬほど死んでほしい」

「……フン、俺だつて信じなかつたさ。この地図持つてきたヤツが、ボロ儲けしてるところを見なけりやあな」

背もたれに身を預けて、机に足を乗せるケイン。この様子だと、本物らしいな……未だに信じがたいけど。

「……まずこの地図何?」

「昔建設されたサテライト拠点の場所を示したモンだ。今は灰域に沈んじやいるが……中には、それなり数の物資が残されてる。だが、狙うのはそれじゃねえ」

姿勢を直して、ケインは地図の端に書かれた文章を指した。そこには、個人とミナト、物品の名前が記してある。

「ここに書いてあるのは、全部金持ちの名前だ。で、そのボロ儲けしたヤツは、ソイツらの依頼を受けて、サテライト拠点跡から頼まれた品を持ち帰ってたんだが……その中のいくつかに、今じゃ手に入らないレア物が眠っていたらしくてな。依頼主も好きにしたいってんで、好きにさせてもらって、ガツポリってワケだ」

「なるほど……そんなのを好きにしていって、相当な金持ちだったのね」
「ついでに、個人で灰域に人を向かわせられる程度にはな」

「ん？じゃあこの地図はどうやって手に入れたんだ？」

聞くと歯噛みしながら答えた。

「ボロ儲けしたヤツがくれやがったんだ。」

「残りのお宝はどうぞご自由に、幸せのおすそ分け」

「ってな。バカにしやがって……灰域の中だぞ、取りに行けるわけねーだろ」

「普通のゴツドイーターじゃあな。そいつAGEだったの？」

ケインは鼻息を鳴らすと、メカミミとディスプレイを手にして、部屋から出る間際に

「極々まれに見る、『変わり者』だ」

それだけ言つて扉を閉めた。

（翌日）

「ふーん……で、なんで俺らまで連れて来たんだ？」

「荷物持ちだ。途中でアラガミかなんかに襲われて、お宝パーとか笑えないからね」

「お前の場合だと俺らをパーにしないか心配だ」

「どんだけ信用無いんだ私は。冗談だよ！トレーラーで来てるんだから、わかるうよ」

ユウゴ、ジークと共に、日没までの帰還を条件にサテライト拠点跡へ出発した。そのサテライト拠点は、ペニーウォートから約20マイル離れた場所にある、丘の上に建てられている。

わりと高い所にあるせいか、灰域濃度はミナト近辺より僅かに低い。が、生息しているアラガミも多い。ゆつくりと探索するわけにはいかなさそう。

道中山あり谷あり、アラガミありで一時間くらいトレーラーを走らせ、無事目的のサテライト拠点跡に到着。

幾つもの小さな住居に囲まれている、一番大きな建物が今回の目的地だ。

「いかにも金持ちが住んでましたって感じの建物だな」

「他の住居もここも、わりと綺麗だね。ホントに破棄された拠点?」

「灰嵐に追い立てられたアラガミが原因で、破棄せざるを得なくなった場所の一つだろう。だが、それにしたってあまり荒れてないのは腑に落ちないけどな」

トレーラーを大きな建物の近くに止めて降りる。入り口の錆び付いた扉を押して……押して……このッ、押し、押——

「押シヤラアボケア!!!」

「氣い短ツ!」

ふう、ついカツとなつて禁断の斬鉄剣（神機）を発動しちまつたぜ……。紙みたいに刻まれた扉が音を立てて崩れていく。これで入れるぞ。

「さあ、お宝探しとしゃれこもう」

「……この扉引けばよかつたんじゃ」

「シヤラツプ」

その建物の中は、窓から刺す光のみで照らされていた。あんまり薄暗くはない、なのでハッキリと中を見渡すことができた。

そう、くつきりハッキリと……奥に纏まって積まれた骸骨までも。

「——また村が一つ死んだ」

……すみません、真面目にやります。その骸たちに向けて私は目を伏せて手を合わせました。ジークとユウゴは一瞬何事かと首を傾げていたけど、私の前にあるものに気がついて、倣うように手を合わせた。

「弔い方はこれで合ってるのか？」

「あつ……えーと」

おっと、思わず生前のクセが。私の国？じゃこれが主流？らしくて、気づいたのは、仲間の遺体を目の当たりにした時のこと。

横領仲間の看守から聞いた話だと、手を合わせる弔い方は、極東のやり方なんだそう。私の住んでた所は、極東つてとこと似てるんだろ。いつか行つてみたいと考えて……!?

「あ——あれはツ!？」

逸らした視線の先に映つたのは、天井から刺す光に照らされて、キラツキラに輝く大量の金! きん! キン! K I N !

「イヤツツツフウウウウウ!! テンション上がってきた!! ウエエエエエイ!!」

「お、おい? ライン?」

「運び込もう!! とにかく持てるだけ!! いや積めるだけ!!」

「おい! ちょっと待て! それに触れるのはマズい気が——」

マズいことになる前に撤収すりゃいいんだよ！とユウゴに返す前に、持てるだけ抱き込んだ金が異様に軽いことに気づいた。それと同時に……金一つ一つに、ホースのように太い管が床と繋がっていることにも気づいた。そのうちの一本が、ピーンと張った瞬間、

『——グルルルルルル……』

「……………oh……………」

そこから窓からの光が途絶えるのは早かった。天井から側面、最後に——入り口！

「クソツ——！」

「何してんだよこのバカ線！」

「バカ線言うな——！」

色々考えるのは後にするが、この建物が私らを喰おうとしているのは分かった！

マイ神機を構えて、銃形態にして壁に向けて乱射。ユウゴとジークも、既に攻撃を始めていた。だけど……………！

「堅ツ——！ただの壁じゃないなこれ……………！」

「こつちもダメだ！傷一つ付いてない！」

思わず後ずさりすると、足下から水の音が聞こえた。

いつの間にか謎の液体が流れ出していたようだ……マズい。展開的に消化液で溶か

される流れやん。

今度は近接武器形態で切れないか試みた。叩きつけた刀身は火花を散らしたが、やはり壁には何の影響もない。

「こりや刃の通るとこ見つけなきゃどうしようも……お？」

それについて一つ思い当たる部分があった。それは私を見事に騙してみせた——金の山、の下！

あの金のあるところからは、床から管が伸びていた。多分獲物がかかったと感知する部分。壁と同じように、ガッチガチにするわけにはいかないはずだ——！

「ニセ金に価値なんざあるかアアアアアア死——に——さ——ら——せエエエエ!!!」

『VORRRRRRR!!!』

「マ、————→→→?!?!?何何何何これ!!?」

金の下から超極太のミミズのバケモノが這い出てきたア!!キモ!!あの金は触手みたいになって、一斉にウネウネと蠢いている!!キモ!!

『V O O O O O O O!!!』

「ワ、————動きもキモ————いい!!」

あの大ききでめっちゃ素早い!?グネグネしながら近づいてくる!!

が、途中で進行方向を変えながら更に大きくうねりだした!!理由は——あの二人の射

撃！あんな動きで回避したっていいのか？

「いや!!当たってねえんだけど!!当てるよ!!」

「う、うるせえ!早過ぎるんだよそいつ!」

ジークが再び神機を撃つ。ジークの銃はショットガンだけど、広範囲に放たれる散弾が一発も!掠りもしない!全部避けられてる!あの見た目で高性能すぎるだろ!

「どうなってるんだ……!?目も無いのに、なんであんなに——」

「目——?そうか目か!!」

ポケットからライトを取り出して点灯する。すると、光に照らされた壁に——閉じ込められる前には無かった黒い点々の模様が浮かんでいた!

「これは!」

「この生き物の『目』だ!どういう理屈か知らんけど、普通の生き物に当てはめて考えない方が良さぞ!」

「なるほど——!で、どうすんだ!」

「私に良い考えがある!」

目がたくさんあるならやることは一つだ。

同時に潰してから、切る!

スタングレネードを二人に見せてから、部屋の真ん中に投擲——炸裂する。

極太ミミズが怯んでいる隙に、ジークがド頭に一撃加え、私が伸びた胴体を串刺して床に縫い付けて、最後にユウゴが——走った勢いに任せて、極太ミミズを根元から断つた。

我ながら良い連携だね。百点。

『VOEEEEEEEEEEEE——?!?!?!』

斬られた断面から鮮血が噴き出したかと思うと、建物が大きく鳴いた。それから部屋が激しく揺れ始め、開いた入り口から三人とも吐き出された。

「ツ痛！」

「ウゲッ！」

「はい生還——！」

『グハア!? ラインてめえ?!』

クッションになる位置にいたのがいけなかったな。

と、今まで入っていた建物を見ると、柱みたいに大きな足が、建物から何本も生えてそれを支えていた。中で見た模様が外にも浮かび上がると、建物は短く鳴いてからそそくさと何処かへ足早に去っていた。

「とんだ災難だぜ……あんなのに行くわすなんてよ」

「人が悪いじゃ済まされんぞこの地図書いたヤツゼッテーぶつ飛ばす」

グチグチ言ってる間に……なんと他の住居も動き出した。足を生やして模様を出す
と、大きな建物に着いていくように歩いていった。

残ったのは、横倒しになってしまったトレーラーと、私らだけだった。

「……ここが荒れてないのは、アイツらが綺麗好きだったからかな」

「……だいたいな」

多分アラガミと思われるあの生き物たちは、家とかの建築物にとりついて、自分の身体にしていたんじゃないかと思われる。家まるごと取り込むとは恐れ入った。

で、私らみたいに入ってくる生き物を捕まえて喰っている。サテライト拠点跡の建築物全部がああな生き物だったことを考えると……あの骸骨はそういうことだ。太陽鳥頭
といいリラといい、変なアラガミにばっか遭遇するわ最近。

おや、大きな建物アラガミが出てきた穴の中に……階段が出てきた。

「今度はアラガミじゃねえよな？」

「……いや、これは元々あったもんだ。あのアラガミがここに獲物が逃げ込まないよう、
隠してたんだろう」

地下施設、そこは取り込まなかったのね。じゃあこれは、唯一残ってるサテライト拠
点跡ってことか。

「さっそく確かめてみよう」

下に続く螺旋階段を降りてゆくと、あの建物アラガミよりか広い空間に出た。当然スイッチがあつても明かりなんか付くはずもなく……と思つてたら、なんとロウソクが置いてあつた。初めて見たロウソク。

「こういうアンティークな作り好き」

「お前古いものよく集めてるもんな」

「よもや、ここに記されていたお宝もそんな類いのものだつたりして」

チャツカマンでロウソクに火を灯していく。部屋中のロウソクに火が付くと、ぼんやりとした明かりで照らし出されたのは、複数の大きな本棚。

収まっている本を一冊開いてみる。オノマトペと、リアルに描かれているキャラクターがいい味出してる本だった。

「つてマンガかよ！しかもこれ全部？」

「わざわざ地下室まで作つて、金持ちの考えることはわからん——」
「あ——————!!!」

そのマンガを前に、私は叫ばざるを得なかつた。男二人は、なんだどうしたと驚いていた顔をしていた。

「拾ってきたマンガの続きだ——!!うおっお!!全巻揃つてる！ホアーツ！懲罰房で!？」

戦闘を誘発!? 隕石!? 風水!? 情報量多過ぎイ! ヒヤアー!!」

「うるせえ! 突然騒ぐことか!」

「騒ぐことだバカヤロウ!! こういうマンガなあ!! 今じゃほとんど残ってないんだよ!! すごい貴重なんだぞ!! 知らん!」

きつとこれだ……! 厄災以前の娯楽作品、愛好家やコレクター相手との取引なら、10万は下らない貴重なものだ。それがこんなに……!

「うおーっ! 銀髪の侍と……! 麦わら帽子の——アツ!? 鬼切りの兄と鬼の妹の話! これ大好き! ワーッ! グラサンアフロのやつまで! 真説まである! 宝の山かここはアアアアア!!」

「……どうする?」

「……………」

一時間かけて本棚ごと運びだしました。

でも、

「……トレーラー」

「倒れたままだったの忘れてた」

起すのにさらに一時間かかった。

「ん——はい、ラインだけど。お？こないだ持ってきたガラクタが売れた？じゃあ分
前はいつも通り。」

はいもしもし。あ、こないだはどーも、大変お世話に……はい今度もまた私にお任
せを！じやまた口座に振り込んできますね。

はいさ、何事？ うん、うん、あーその件は金握らせて——」

——ただし反則技で！

「お前殺されかけたくせに懲りねえよな」

「つたりまえよオ、財政難真っ只中の今が稼ぎ時なんだ。これを逃して何を得るってん
だ」

「ミナトのヤツらよか悪党だな！」

「褒めるんじゃないよアーハハハハハハ!!」

……笑い事じゃねえんだぞ。心配させやがって、バカ線野郎。

ジークと馬鹿笑いする声が耳障りになって、少しでもそれを遮ろうと、俺は通信機を
オンにした。

「こちらハウンドー。これよりミナトに帰還する」

だがこの日は、ミナトからの返答がやたら遅い気がした。灰域の濃い所を通ってるか

らか……？

もう少し経ってから、また連絡してみるか。

好機第一

「ミナトと繋がらない?」

眉をひそめるラインに、俺は頷いた。

時間をおいて無線を入れ直したが、何度やってもノイズしか帰ってこない。

「お前は普通に出来てたよな?」

「いや、実は外部からの通信なんだわさっきの。監視のない時によく注文とかされたりさ、金払いいいから断れなくて」

「これ以上罪を重ねんな」

「……?」 だとするとおかしい。ミナトには繋がらなくて、それ以外の所へは問題ない。中継機の故障にしては妙だ、これは――

「ユウゴ!前!前!」

「へ? うお――つ!?!」

ジークの声に、慌ててブレーキを踏む。前にアラガミの群れがいたからだ。

なんとか衝突は避けられたが、アラガミたちは牙をむいてこつちを睨んでいる。

「やるしかねえか……!」

神機使いとしての実力は確かで、その戦いぶりはさながら、『鬼』のようだった、と。

——その方も預かることになるんでしょうか……？——

……あの時の不安そうな目が忘れられない。オーナーは優しいからな、俺を受け入れた時もそうだったけど、行き場の無い人間を、放っておけない人なんだよな。

(もし、噂通りだったとしたら)

咬刃展開形態で刃を伸ばして、一気に3体のアラガミを屠る。アラガミは叫び声一つ上げずに、倒れて塵になった。

(同じAGEだろうと、どんな身の上だろうと構わない。あの人たちを傷つけるなら——)

神機に滴る血を払って、短く息を吐いた。少しとぼしすぎたかもしれない。だけど、まだやれないこともない。とりあえず連絡をしようと、ヘッドセットに手を当てて、スイッチを入れる。

「……アラガミの排除が終わった」

『——お疲れ様です！船の周囲にアラガミの反応無し。このまま前進します』

可愛げのある、高い声音が帰ってきた。それに次いで、太くて低い声が届く。

『いやあー、今日も良い調子だねえ。オジサン楽で助かるよ』

「……」。俺はあなたと一緒にここに立ちたくてAGEになったんだ、これじゃあ意味が

無い」

『いや、まあ努力はしてるんだけどさ。ホントだぞ?』

「いやだ。もっと頑張れ、時間作れ」

『俺君のたまにわがままな所好きだわ』

笑いながら誤魔化された後、ため息の混じった凛とした声が割り込んできた。

『——コクウ、あまりリカルドを困らせないで。今回はあなたにしか頼れないのよ』

「オーナー、仕事くらいちゃんと自分で捌きなよ」

『余計なお世話よ!』

そんなやりとりをしていたら——アラーム音と共に、最初の高い声音の持ち主が、声を張り上げてきた。

『ツ! 新たに中型種が進行方向に出現!』

「……オーナー、この話後な。行ってくる」

『コ、コクウくん! さすがに一人では——コクウくん!』

引き止める声を見無視して、俺は船の行き先へ駆けだした。

……例のAGEがどんなやつであれ、オーナーが助けるって言ったんだ。なら俺は、その道を切り開くまで。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

「神喰いの呼吸壺の型〜!! 高速8の字斬りイイイ!!」

「なんだそりゃ」

「呼吸でバースト出来るんだよ! 知らんけど」

向かってくるアラガミを切って喰ってを繰り返すこと数十分。今塵になったアツクスレイダーを最後に、戦闘は終了。主な損害無し。んーいつになくパーフェクト。あとはこれで金目のものでも落ちていれば。

「なあ、さっきのアラガミたち、なんか変じゃなかったか?」

「変? アラガミが変なのは元々でしょ」

「いやそう言うのじゃなくてさ、あいつら襲ってくるっていうか、逃げてる感じじゃなかったか?」

「?」

言われてみれば、最初見た数に反して、こつちに向かってきたアラガミは少なかった。ジークはそれに気づいて変に思ったんだろうな。

となると、アラガミは今帰ろうとしている方向から逃げてきて、私たちと鉢合わせしたってことだけど……。

『——からキャ……ン! 周……AG Eに通……!』

現…、近……リアにて灰嵐……生! ペニーウォ……接近……!』

「? なんだ?」

「オープン回線?どこのどいつだ、何言ってるのか聞こえねえよ!」

急に入った通信に二人が戸惑う。ノイズが入りまくって、途切れ途切れにしか伝わってこない音声。しかし!こんな時に備えてこのメカミミには、ノイズをできる限り除去することができ機能が搭載されているのだ!処理をしてからもう一度リピートしてみ、る……と……

「……ねえユウゴ」

「ん?」

「……勇気があるなら私の代わりに振り返ってもらえるかな」

「なんだ、らしくもねえ。お前が怖がるものなんかそうそうあるもんじゃ——ツ!」

思った通りユウゴが声を詰まらせた。次いで、ジークも後ろを見たつぽく、驚いた顔をしていた。

「なんだ……!?!アレ!?!」

「何が見える?」

「その、なんていうか……!」

「あ、わかった。黒い霧みたいな塊が津波みたいに押し寄せてるとか言うんだろ」

「……当たりだ」

「やったぜ、ご褒美ちようだい。賞金10万と黒毛和牛……は、いいや、食欲が失せた」
観念して後ろを振り返ると――

轟音を立てて、時々稲光を中で走らせながら、一切合切を飲み込みこんでいく大波――
――全てを塵に還す災害の全貌が目に入った。

「間違いないえ、『灰嵐』だ――！」

「……俺たちのミナトの方に向かってないか!？」

「クソ、何だつてこんな時に!ここからじゃ先回りするのは不可能だ……！」

「そんな……!じゃあミナトの仲間たちは!?!ガキ共は!？」

はいはいちよい待ち、こんなこともあろうかとパート2。内緒で仕掛けてもらった中継器で確立させた私専用の秘匿回線の出番だ!これもOSIGOTOで仲良くなった親切な人に設置してもらいました。

さつそくミナトにいるであろう横領仲間にかけてみよう。

「あー、こちら泥棒狼、こちら泥棒狼。百合獅子応答求む」

「どんなコードネームだ!」

「繋がった――はい落ち着いてねー、ラインさんは無事だよー、どしたどした、深呼吸して話してみ?」

ひどく取り乱す相手を宥めて、ミナトの状況を聞き出した。いや、詳しく言うと、も

うミナトにはいなくて、灰域の中を失踪中だという。灰嵐が接近したと聞くや否や、管理者と幹部、職員、一部AGEを灰域踏破船に收容し、すぐにトンスラしたそうだ。

「……ドケチ主義のペニーウオートが船持ってたとは驚きだわ」

「アイツらア……!」

「一部AGE、つてことは——まだ取り残されてるヤツがいるのか?」

私がユウゴの問いに答えようとした直前に、さっきのオープン回線が再び届いた。今度はノイズ無しでハツキリクツキリ。

『こちらキャラバン! 周囲のAGEに到達! 繰り返す、こちらキャラバン! 周囲のAGEに到達! 現在灰嵐が発生中!』

キリツとした女の声。こんな声聞いたことない、ペニーウオートとも、その取引先のミナトとも違う、別のミナトのキャラバンからの通信だったみたいだ。

「こちらAGE! 灰嵐の状況を知らせろ!」

『繋がった……! 話は後よ、この船の進路上にアラガミがいる! 排除して!』

「何をやる気だ!?!」

『話は後と言った! いいから従いなさい! 報酬の交渉なら、後で幾らでも聞くわ! 本船はミナトの救援に向かっている、事態は一刻を争うの!』

……うーん、ぶっちゃけ信用しきれないけど、こつちの話を全く聞きそうにねえ。一

番二ガテこれ。

「ハイ、キヤラバン！いや、火事場泥棒？どっちでもいいけど、それ信用していいワケ？助けに来るのはいいけど、ミナトにやもうチビたちしかいないよ？いいの？ビタ一文にもならないよ？」

『だ、誰がそんな——こ、コホン！必ず助けると約束する！通信は以上、健闘を祈る！』

よほど焦っていたのか、見知らぬキヤラバンからの通信はそこで途絶えた。

「よつしやるぞユウゴ！コイツらなら大丈夫そうだ！」

「……いつになくやる気なのはいいことだが、理由を聞いておこうか」

「さっきのヤツらが押し入り強盗なら船ももらえて一石二鳥！ただのいいヤツらだったら余計な手間を取らずに船がもらえて一石三鳥！」

「なんでいいヤツでも盗るんだよ」

やめとけ、と言われたのでとりあえず保留にしといて、さっそく今のキヤラバンが送ってきたと思われる座標を確認する。記されているのは、元・郊外の開けた場所。ここを船が通るわけね。

「ん、ここはもしかして」

座標を示した地図の端に見覚えのあるものが目に入って、少し拡大して確かめる。

「お、やつぱりだ。ねえ二人とも——」

『VOOO——ッ!!』

だがこいつは、バルバルスはバリバリの近接戦闘タイプ。何度下がっても、素早く動いて距離を詰めてくる。なら、と高い所に居座ってみたが、地面に潜って回避するばかりか、地中から高所まで移動してくる。

(こうなったら、中距離から——)

ドリルの射程外かつ、突進されてもすぐに回り込む事ができる。わざわざ地中移動をする距離でもない、これなら……!

『OOooo——VOAッ!!』

「なっ——」

バルバルスがドリルを上に掲げて、地面に刺した瞬間、氷柱が生成され、それは連鎖して地面から生え続け、俺の方へ向かってきた。

間一髪、左にステップして氷柱を躲し——

「ガッ——!?!」

避けた先に岩が飛んできやがった……! ヤツがドリルを引き抜くと同時に飛ばしたのか。

俺が怯んだのを見計らってか、バルバルスは全力疾走して接近してくる。

強い、いや——これは一人で対処するには、あまりにも向いていない……! —

(迂闊だった——！)

走る勢いのままに振りかぶったドリルが、真っ直ぐ俺に突っ込んでくる。マズい、防御が間に合わ——

「——アアアアアアウイリーイイイイイ!!?!」

『V O M O A A A a a a ——!!?!』

……………???

今、バルバルスに突っ込んできたのは……バイク？

ぶつかってきたバイクは乗ってるヤツを振り回しながら、瓦礫にぶつかってやつと止まった。なんだアイツは。

「——おい！めっちゃウイリーしてたけど大丈夫か？」

「つたく、一人で突っ込むんじゃねえ！」

今度はバイクに乗ってたヤツの仲間が現れた。両腕の腕輪を見るに、あいつらはA G

Eか。こんな所で何を——まさか……。

「……オイ、どうすんだ？」

「はい？」

「はい？じゃねえだろうが！ややこしい状況にしがつてお前！」

「ああ!? テメツだったら名指しで武器構えられてみるや！すっげー怖えんだぞ！」

「だからつて死んだはねえだろ！」

「目の前にいるつてバレたらヴツ殺されるに決まってるでしょうが！」

「お前からケンカしてる場合かこんな時に！」

「ゴメンユウゴ誰が喋ってるかわからなくなるから間空けて話して」

現在の状況――

灰域踏破船の通路を確保するべくアラガミ討伐に行ったらアラガミより先に鎌持つたお兄さんに討伐されそう。

もうね、嘘すぎじゃない？いや私がしてきたことを思い返せばいつか来るとは予感してましたけども、寄りによつて今かよ。流星にアラガミ目の前にしてコロシアイなんてことにならなかつたけれども。

腕ドリルの冷凍ビームをちよん避けて躲しつつ、ユウゴに訊いた。

「……てか、まず誰だあの兄ちゃん」

「お前の事を知っているようだが、知り合いつて訳でもないんだろ」

「それそうよ、初めて見たもん」

答えながら、ユウゴは銃形態で牽制する。

突進してくる腕ドリルを、ハンマーのフルスイングで迎撃したジークも言ってくる。

「ペニーウオートのヤツじゃないのは明らかだよな？」

「それそうよ、初めて見たもん」

「同じ受け応えしないでくれる？」

腕ドリルが3連ドリルを高速回転させて跳ぼうとした瞬間、銃撃音が聞こえたと同時に、腕ドリルが派手にすつ転ぶ。後ろを横目でチラツと見ると、少し高い所から銃形態、スナイパーを構えた鎌の人が見えた。

「じゃあアレか、さっきの通信超越したキャラバンのAGEとか？」

「それそうよ、初めて見たもん」

「……………1＋1は？」

「それそうよ、初めて見たもん」

「お前話聞いてないだろ！」

（このセリフ、汎用性高すぎて草）
「それそうよ、初めて見たもん」

「普通に話せ！あとそんなにねえよ汎用性！」

腕ドリルの薙ぎ払いを後ろ宙返りして華麗に躲す。でも腕ドリルは、また一歩踏み出

して薙ぎ払い。同時に私も、再び後ろ宙返りで躲す。3回目の薙ぎ払いのタイミニングで、隠し持っていた対アラガミ用投げナイフを投擲。腕ドリルの顔面に見事命中、立ち止まった所へ一気に接近して、顔面に向かってフルスイングで神機を叩きつける。狙いは、さつき刺さったナイフ！

「でありやあ——ッ!!」

ナイフはさらに深く刺さり、腕ドリルが苦悶の声をあげる。もう一息で倒せるはずだ。

「さて——肩も温まってきたし、『必殺技』いくか——!」

「なっ——!?!」

「お前ッ——アレを使う気か!?!」

使う気です。何でだろうね、テンション上がってきてるんですわ。

ステップその1・バーストアーツを放つ容量で、オラクルエネルギーを神機に纏わせます。

「バカやめろ! オイ! せめて何も無い所に誘導してから——!」

ステップその2・神機の切っ先を回して、オラクルエネルギーの渦を作ります。

「あの女……何を?」

ステップその3・纏ったオラクルエネルギーがひとりで渦を巻き始めたら——

「じゃあジーク?」

「こんな時にンなことやるわけねえだろ!」

「なら誰だよ!」

そんなこと言つてたらまた殺意高めの弾丸が飛んできた。これまたスレスレで防御する。

「ギャーツ!?ちよ、誰だマジふぎけんなヨオオイ?!!(※マジギレ)」

「ふぎけてない。何故なら今からお前を仕留めるからだ、ライン・ペニーウォート」

——今一番呼ばれたくない名前を、今一番呼んで欲しくない人物が口にした。

恐る恐るさっきのセリフが聞こえた方を見ると、鎌のお兄さんが、殺し屋みたいな(と
いうかそのもの)目で睨みながら、神機の銃口をこっちに向けていた。

これは 殺られる !

「……………あの……………人違いでh——ア、——!!?」

「ライン——うおっ!」

「どわあ?! 何しやがる!」

私がかまた撃たれた瞬間、動こうとしたユウゴとジークの神機が火花を散らした。鎌のお兄さんが片手にピストルを持っているのを見ると、それで狙い撃つたみたい。しかしなんでわざわざ当てるかな……。

「言っておく。俺は外さない」

「? ? ?」

「えーと、無駄撃ちをしない主義であると——マ、——!!?」

うん! どうやら銃を脅しに使わないタイプだ! どつかの皇帝も言ってたもん! 「これは脅しの道具じゃない」 って! ヤバイよ! あのお兄さん生粋の殺し屋だよ! 絶対1万人くらい殺してるよ!

「ちよ、あの! すいません! ウソつきました! 私です! ライン・ペニーウオート——ワ、——!!?」

問答無用でぶっ殺そうとしてくるお兄さんに、私は構わず声をかける。

「あのお!?! どつかで会いましたっけ!?! 失礼ですが覚えが無くてですね——メ、——!!?」

防御し続けて手が痺れてきたけど、まだ続ける。

「あれですか!?! サテライト拠点産の改良品種ジャガイモを農業専門のミナトの名前産で出品した件——ナ、——!!?」

「お前なんちゅーセコいことしてんだ」

「じゃあなんだってんだよ一体ヨウ! 言わなきゃわかんねえだろオ!?! (※逆ギレ)」

私の荒げた叫びに、今度は弾丸じゃなくてアンニュイな声が返ってきた。

「お前、小さいが灰嵐を起こしただろう。そんなことができるヤツは一人しか思いつか

ん——ライン・ペニーウオート、その技術を売りさばいて儲けていたんだろう」

「は——ハア!?!」

一体何のこつちや。……いやその手があったか!とは思いましたけれども、実行には移してないし、そんなこととしてたら流石にしょつぴかれますって。

と、お兄さんは神機を鎌に戻して、私に突きつける。

「そんなヤツを船に乗せるワケにはいかない。ここで始末する」

「や——ちよちよちよちよちよちよ!?!待って!?!待って!?!誤解がある!まだ未遂だよ!?!」

『未遂ッ!?!』

あ、やべ、思わず考えに引きずられて声に出ちやつたよ——

「つてうおおおおおマジで仕掛けてきたア——ーツ!!?!」

突然の失言で冷や汗をかく間も無く、お兄さん、いや、暗殺兄貴の鎌が私の首を撥ねるべく迫る——それを寸前でショートブレードで受け止める。甲高い金属音と火花が、

顔の横で飛び散った。アツツウイ!ウルツセエ!

「——」

暗殺兄貴の手元からカチツと音が鳴る。すると鎌の柄が伸びて、私の神機を引っかけて、そのまま奪っていった。

暗殺兄貴は鎌を後ろに振るって、奪った神機を放ると、縦に鎌を振り下ろす。こつち

は無防備だと思っっているんだろがしかし！こんなこともあるかと、大昔作られた、偏食因子を練り込んだ太刀で作った仕込刀が――

「させるか――ツ!!」

「ツ……」

――お披露目されようとしたところで、ユウゴが間に入り、鎌をロングブレードで防ぐ。

「どりゃあ――!」

「……!」

次にジークが、ハンマーのブースターを噴出した勢いで跳び蹴りを暗殺兄貴に繰り出した。

横に吹っ飛んだ暗殺兄貴は、空中で体制を整えて、バク転するように手で地面から跳んで、しっかりと着地して私らに向かい直る。

「……お前たち……!」

やっだあ、怒ってるう、さつきから変わらずだるそうな顔してるくせに、眉と目の間狭くなってるよ。

「待ってくれ！コイツはバカだがめつくて、本当に心の底からどうしようもなく下劣なヤツだが、人殺しみたいなマネはしねえ!」

笑いかける彼女ライオンに、俺は一気に、申し訳ない気持ちでいっぱいになって、一步前に出て、頭を下げた。

「すまない……っ、俺の勘違いで、ヒドいことを……」

「え、ああいや。しよつちゆうあることだから。気にしなさんな」

「ホントにな」

「うん」

「ウルツツツツセエぞおんどれア酢味噌に漬け込んだろカツツツツ」

『こっわ』

!?!?!?!?

そして、ペニーウオートの噂の真相も聞いた。

ラインが取引していたのは、別に違法なものではなくて、儲けはこつそり自分たちの分を増やして、ミナトのAGEたちにまわしていたせいで、羨んだミナトの職員からあんな噂を流されていたらしい。

ミナトを乗っ取るうなんて、とんでもない嘘っぱちだったってことだ。

やつてることは犯罪だけど、俺はそれを咎めるつもりはない。コイツは……やることはメチャクチャだけど、自分を省みない、優しいヤツだと思うから。

「おー！あれがコクウくん所属の船？」

俺たちの居る待機ポイントに向かってくる船——灰域踏破船「クリサンセマム」が目

視できた。あっちも無事にAGEたちを回収できただろうか、それを聞く前に、エイミーとオーナーからのお叱りが飛んできそうだけど。

でも、ライン・ペニーウォートが、危険なAGEじゃなくてよかった。

「ならコイツを——派手に打ち上げちゃらああああ!!!」

「ちよつと待てなんだそのバズーカ!?」

「お前ホントに乗っ取る気だったのか!?!」

「いやー、これね。たまたま仕事でもらっちゃったパーティー用の……」

——始末、する。

「お?コクウくん、そんな目をして何を——あ、待って、は、話せば、話せばわか——

ア

!!!!!!
」

この後、このバズーカが特製クラッカーだと気づくのに、俺は2時間かかったそうだ。